

タイトル： 洋上救急の記（２） 海上保安庁第三管区「瑞穂（みずほ）」

病院の前に待機していた白いタクシーに乗り込むと、何も言わず発車。行く先は決まっているのだ。さあ、これから何が待っているのだろうか？ 想像もつかない。そう言えば、何も聞かされていなかったことに気が付く。そもそもどこの海へ、いったい何に乗って行くのだ？ 遠いのか？ 近いのか？ 知らないのである。

見慣れた夕暮れの伊勢佐木町が、今日は縁もなく後方へ走り去ってゆく。どこへ？ と聞くと、愛想の悪いタクシー運転手は「いつもD突堤だね」と言った。いつも？ そうか、彼は何回も同じような場に立ち会っているんだ。無論「D突堤」などと言われても知る由もなかった。記憶をたどってみると、横浜海上保安庁舎の角を曲がって、港に向かう一般人の立ち入らない区域だったように思う。暗い、ひと気のない倉庫群のような一画だった。

今思うと「ワールドポーター」か「しらくの湯」辺りの西側の道ではなかろうか？ ずいぶん変わったものだ。

さて、当時（1990年頃）まだ陰気だった波止場にタクシーは急停車した。いかにも急いで来ましたよ！ と言わんばかりの止まり方で、こちらはつんのめった。ドアが開くと、二人の白い制服隊員さんが走り寄って来て、敬礼の所作で迎えられた。

おっ！ 本格的だ、緊張してくる。

ふと見上げると、客船以外では見たことのないでかい船が尻を見せて停泊している。すでにエンジン音は叫び声をあげており、僕は急かされるように狭いタラップを走って上がらされた。前後を隊員さんに挟まれているのでほとんど連行と言っていい。登りきると、もうタラップは折りたたまれ船体は離岸し始めていた。

おお、俺だけを待っていたわけか？ 背筋が伸びる思いだ。

船内の床は体育館のように緑一色で、10センチ幅の白線が各所に引かれていた。整然として静寂、エンジン音の鼓動だけが充満している。ひと影はない。

全員が各部所で働いているのだ！

すぐに、小柄で年長の一線をご引退されたらしき隊員さんが現れ、僕の世話係だと告げた。

「よろしくお願いします」と双方挨拶。

「お部屋にご案内します」と自室となる船室に連れて行ってくれた。

そこは三畳ほどの広さで、50センチ幅程の簡易ベッド、船らしい20センチ直系程の丸窓があった。一日で帰れるはずだったので、眠るまでもあるまいと思い狭いベッドをながめていると、隣に手術室があるというので見せてもらうことにした。なぜか？ 婦人科でも使えそうな手術台があり、

すぐ横に診察机があった。

驚きながら戸棚や引き出しを開けてみるも、手術用の機具はなく学校の救急箱に入ってる程度のものであるくらいだった。薬も家庭用常備薬程度であり、確かに医師が常駐しないのだから仕方が無いのだ。

手術室を見終わると、世話役殿は「船長にご紹介します」と言い、やっとすれ違えるくらいの狭い階段に案内された。息せき切って登ってゆくが、前をゆく彼は年長ながら息も乱れることがない。

すごい！ と舌を巻いた。

まもなくデッキに到着という辺りで彼の解説が始まった。

この船の名は「瑞穂（みずほ）」であり艦載ヘリコプター二機を擁する、5300トンの巡視艇。海の警察、海上保安庁の関東を区管する第三管区の旗艦だそうだ。かなり感動だ。

海の警察とは正当防衛と犯罪抑止、不審の攻撃に応じるため銃火器等の武器、大砲も搭載しており海上の犯罪行為に対し逮捕権も持つ。いろいろ初めて知ったことばかりで、少年の心がよみがえり得意な気分になった。船長にお会いする前に良い勉強をさせてもらった。それにしても、ずいぶんラフな格好で来てしまったことが気になったが、これは致し方ない。お許し願おう。

ちなみに東北が第二管区、北海道は第一管区なんだそうだ。

やっとの思いで階段を登りきると、甲板室（操舵室、デッキ？）に入るドアを開けていただいた。気持ちは厳かに張り詰めた。

操舵室には船長が威厳ある態度で起立しており、3人の部下らしき航海士さんたちが、せっせと動いていた。みな、この船のエリートたちである。椅子はないので立ったままの挨拶だ。

「この度は、よろしく願いいたします」と船長さまに言われ、

「こちらこそ、よろしく願いいたします」と不思議な挨拶となった。

船長は笑って「どうぞ東京湾を出るまで自由にご覧になっていってください」と、とてもフレンドリーだ。

前方は全面硬化ガラスで、広大な範囲の海原を見渡せた。ここはまだ東京湾の内海である。波もなく静かだ。

だが僕はここで、かつて見たことのない壮大な光景を見ることになった。

つ・づ・く